

## 資源管理・海洋環境シリーズ

# スケトウダラとマダラの精巢は なぜ「タチ」と呼ぶのか

キーワード：スケトウダラ、マダラ、精巢、白子、タチ、狩人（マタギ）、内臓呼称、臍臓、ト占

### はじめに

魚の雄の生殖腺（精巢）は一般的には白子と呼ばれますが、北海道ではスケトウダラ（通常スケソあるいはスケソウ＝助宗と呼ぶ）やマダラ（真鱈、通常タラと呼ぶ）の場合に「タチ」と呼ぶのが一般的です。スーパーマーケットの食品売り場では、スケトウダラの精巢は「助タチ」、マダラは「真タチ」と区別して表示・販売されています。タチは乳白色で、房状になっており（図1、2）、タラ科魚類の精巢の特徴的な形態です。

20年くらい前までは、スケトウダラやマダラの漁獲が沿岸で始まる晩秋から初冬になると、マスコミからタチの呼び名の由来について問い合わせが水産試験場に来るのが風物詩のようでした。その後、平成8年頃からインターネットが普及し始め、水産物の冷蔵輸送・保存技術が発達した今日では問い合わせも皆無になりました。昭和の頃は冬場の漁師町のごく一部で珍味として食べられていた生のマダラのタチを使った刺身（タチ刺し）や天ぷらなどの料理が、今日では多くの居酒屋でも普通にみられて消費されるようになり、マダラの雄の値段が雌より高くなるほどです。

私もスケトウダラやマダラの調査担当者だったので、何回かマスコミ対応をしました。下ネタ好きの水試の先輩は、「平家一門の子弟など貴族の「むすこ」をきんだち（公達）と言うのが語源ですよ」などと怪しげなことを言っていました。

そこで何か根拠になる文献はないかと調べてみ

ると、中央水試の図書室にある岩波書店の「広辞苑第三版（1983）」に「たち」の項目があり、「獣の臓腑。狩人はこれを尊重して山の神に捧げ、または賞味する。たつ。」と記載されていました。そこで「産卵期のタラ科魚類の腹を開くと精巢（白子）があふれんばかりに飛び出し、いかにも獣の

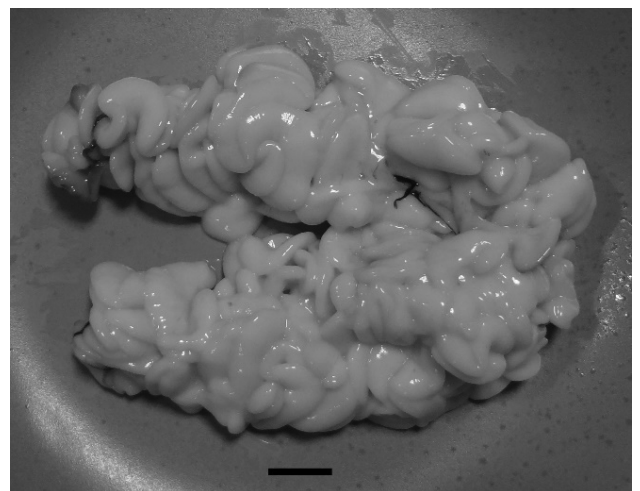


図1 成熟したスケトウダラの精巢（助タチ）の1尾分（横黒バーは1cm）

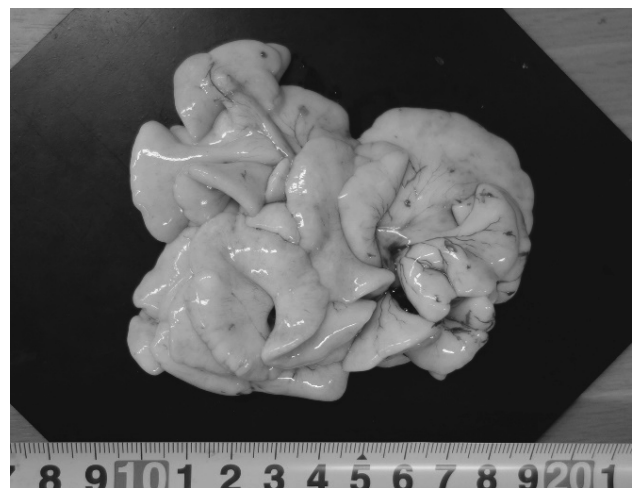


図2 成熟したマダラの精巢（真タチ）の一部

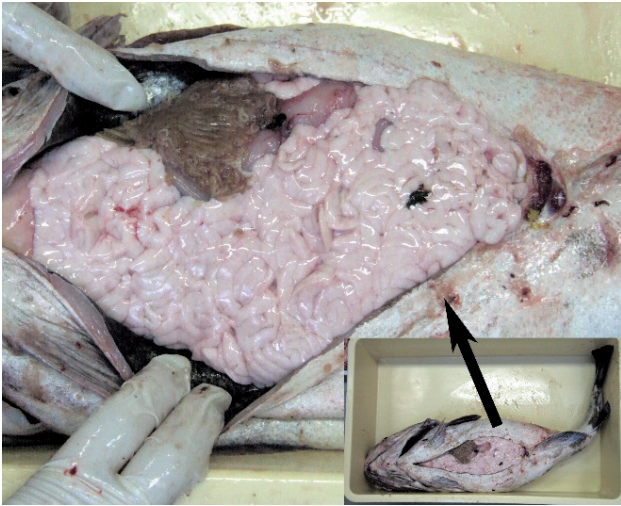


図3 成熟したマダラ（雄：尾叉長86cm、体重8277g、生殖腺重量1907g）の腹を開いたところ。腹内は精巢で埋まり、上方に胃の一部と幽門垂が見える（拡大写真の横幅は400mm）

内臓のように見える（図3）ので、狩人が使う「たち（たつ）」と同じ呼び方になったのでしょう」と説明してきました。

### 北海道以外での呼び方は？

本州ではスケトウダラはマイナーな魚種で、マダラのほうがメジャーな水産資源であるため、マダラの白子についての呼び方を、文献とインターネット情報も合わせて調べてみました。

青森県（脇野沢）では北海道と同じ鱈の料理である「白子（たつ）汁」（川岸、1982）があり、道南地方と同様に「チ」と「ツ」の区別をつけない発音の土地柄なので、北海道と同じ呼び方といえます。山形県においては冬場のマダラを使った鍋料理の「どんがら汁」は冬の風物詩であり、白子については同じ庄内地方でも鶴岡では「タツ」、酒田では「ダダミ」と呼ばれるそうです。秋田県人の方は「ダダミ（ダダメ）」でないと唾が出てこないとか。石川県でも「ダダミ」、岩手では「キク」と呼ぶそうです。

北海道から日本海に沿って石川県まで分布する

マダラの精巢の呼び方は、山形県でタチとダダミが境界となっており、太平洋側は見た目の形からの呼び方になっているようです。見た目の表現としては、ほかに雲腸（くもわた）、雲子（くもこ）、菊子（きくこ）がみられました。

以上、なるべく「故郷の親はこう言っていた」というものをセレクトしてまとめてみたのですが、ネット情報もそれなりに信憑性があるように思いました。ただ、本州日本海側でメジャーな「ダダミ」という呼び方の由来については想像することすらできませんので、関係県の方にお任せすることにして、ここでは北海道での呼び方である「タチ」について、広辞苑の狩人に関する記述を手がかりに調べてみました。

### 狩人が呼ぶ「タチ」とは

千葉（1977）は「狩猟伝承研究後篇（風間書房）」の中で、狩人が用いる野獣の内臓呼称を調べ、「臍臓が全国的にタチの名称で知られ」、「狩猟を事とするアイヌ族は、半月形をしている点で臍と脾とを同じChupの名で呼び、区別しない」が「非狩猟農耕民と考えられる日本民族では特別に呼び分け、南西諸島から青森県まで同様であるというのは、これがト占（注：ボクセン、占うこと）に用いられたためではないか」、「奥羽のマタギたち（注：かつて、独特な文化を持ち、狩猟を生業としていた人たち）の間はかなり広く認められるのに、臍臓を火にあぶって、粘膜がふくれてパチンとはねる方向を見て、その方角に向かって次の獲物を求める占いがある」と記述しています。

タチの語源については、「九州あたりでは、猪（注：イノシシ）のこの部分に弾丸が当たると、大いに怒って山中を狂い走る。つまり、腹を立てるからタチだなどと解説する者もあるが、占に用いる処からみて神の示現を意味するタツという言葉

葉とも関係するであろう。腹がタツなどという言葉も、この器官あたりにムカムカとする感覚が起こるところからの、人にも獣にも通じた呼称であったのかもしれない」と述べています。

### 「臍」は日本生まれの字

土屋(2001)は臍臓の語源について調べています。それによると、臍臓という臓器は中国や日本では西洋医学が入るまでその存在が知られておらず、五臓六腑には含まれていなかったそうです。鎖国をしていた江戸時代に「蘭学事始」で有名な杉田玄白が西洋医学を導入したことは、私も中学校の授業で学んだことを記憶しています。オランダ語の図入り簡約解剖書「ターヘル・アナトミア(もともとはドイツ人クルムス原著の解剖図譜のオランダ語訳本で1734年アムステルダム刊)」を入手していた杉田玄白は西洋の医書の正確さを試したいと思い、前野良沢らと1771年江戸の北郊の小塚原の刑場で刑死体の解剖に立ち会う機会を得て、「解体新書」を1774年に出版しました。しかし杉田玄白らは臍臓の *alveesh* というオランダ語を訳しきれず、大きな腺と解釈し大機里爾としました。なお、解体新書の機里爾(キリール)を「腺」、大機里爾を「臍」と、それぞれ新しい国字を作って発表したのは宇田川玄真で、1805年に刊行した「医範提綱」でこれらの字が初めて世に出ることになったということです。

### おわりに

以上のように、一つ一つの文字にも奥深いものがあります。しかし「臍臓」がマタギの呼ぶ「タチ」であることはわかりましたが、これがスケトウダラやマダラの精巣とどうつながるのかはわかりませんでした。ただ、成熟したスケトウダラやマダラの精巣と臍臓の形や色が似ていることは事

実です。そして森林資源の多い東北地方を中心に、町場の住人とは異なる文化を持つマタギが多く活動していたこと、また、より未開拓の地である本州北端から北海道では、マタギたちも当然のことながら豊富な水産資源も含めて文化や慣習などの規範に左右されず、自由に利用(狩猟)できたであろうと考えられます。そして私が成熟したマダラの雄の腹を開いた時に感じた印象と同じように、そこに獣の内臓のイメージを抱き、タチと呼んだのではないのでしょうか。

### 引用・参考文献

- 大木 昌. 近代化と「山の文化」の変容—マタギ文化の歴史的検討を通して—. 明治学院大学国際学部附属研究所 研究所年報. 2012; 15、10-46.
- 改訂版角川古語辞典(武田祐吉・久末潜一編). 角川書店. 1968.
- 川岸信一郎. 鱈の来る村. 伝統と現代社. 1982.
- 広辞苑第三版(新村 出編). 岩波書店. 1983.
- 千葉徳爾. 狩人の内臓呼称. 狩猟伝承研究後篇(風間書房). 1977; 88-99.
- 土屋涼一. 臍の語源について. 胆と臍. 2001; 22(12)、1133-1137.
- 山形県農産物マーケティング協議会. 山形のうまいもの(TAMIYA CREATIVE J2企画デザイン). 1998.
- <http://www.4071.net/feature/kanndara.html>.
- 特集「寒鱈汁がうまい!」庄内の冬. 2015(2016年8月8日現在 <http://www.4071.net/>「庄内を遊ぼう!」のHPは休止しています).

(吉田英雄 水産研究本部企画調整部

報文番号 B2402)